

## グラームの諸相 —— アッバース朝におけるイエと軍事力 ——

清水和裕

### はじめに

論者はこれまでに、論文「九世紀アッバース朝のアトラークと奴隷軍人」において、サーマッラー時代のアトラーク部将たちが、自らのイエを中心とした私的軍事集団を形成しつつあったことを指摘し、また論文「マムルークとグラーム」においては、ワラー walā' とイスティナー ištīnā' と呼ばれる個人的な紐帯を軸としたイエの在り方が奴隷軍人集団の形成と密接に関わることを論じた [清水 1990, 1999]<sup>1)</sup>。本稿は、これを受けて、サーマッラー時代以降のアッバース朝社会におけるグラーム ghulām と呼ばれる集団の諸相について、有力者のイエの在り方と私的軍事集団形成という問題意識の上から検討する。

アッバース朝8代カリフのムータシム al-Mu'taṣim が購入した奴隷軍団アトラークは、通常 al-ghilmān al-atrāk (トルコ人グラーム集団) と呼ばれていた。彼らが軍事集団であったことは間違いがないが、グラームという用語自体は軍事集団のみを指すものではない。グラームの本来の意味は「少年」であり、のちのカリフですら幼少時にはグラームと表現されることがあった [Ṭabarī III : 1485]。グラームを事実上奴隷の意味に理解することもあるが、D・スールデルが指摘するようにグラームは必ずしも奴隷とは限らない [Sourdel 1965]<sup>2)</sup>。このことを勘案すればグラームとは奴隷身分そのものではなく、後のマムルーク mamlūk と同じように、主に奴隷身分の者によって担われる職能であると理解するべきであろう。それゆえにグラームは奴隷身分から解放された後もグラームと呼ばれるのである [Wuzarā' : 16]。アッバース朝期の歴史史料においては、奴隷身分そのものは多くの場合

1) アッバース朝のグラーム軍団に関する先行研究およびその諸問題については、これらの論考に詳述したのでここでは繰り返さない。M. Gordon は博士論文である [Gordon 1993] をもとにした著作の出版を予定している他、最新の論文として [Gordon 1999] を発表している。

2) ムータディドのグラーム ghulām al-Mu'taḍid [Ṭabarī III : 2209] として知られるバドルは、[Murūj 4 : 312] によれば自由身分だったと言われる qālū wa kāna Badr ḥurr. バドルが当時グラームと呼ばれていたことは、これを記述するタバリーが、バドルの同時代人であることから間違いのないであろう。一方、バドルが自由身分であったことは、わざわざマスウディーが伝聞体を用いてまで記述している以上、当時の人々にとって意外性のある話題であったと考えられる。しかし、マスウディーの伝えることが確かであるとするならば、自由身分の者がグラームと呼ばれ得る事実があるわけであり、グラームを奴隷と同一視することはできない。

'abd や mamlūk の語であらわされると考えるべきである。

それでは、グラームとよばれる人々はどのような職能を持ち、それはアッバース朝社会の歴史においてどのような意味をもっていたのであろうか。この点に関して、嶋田襄平氏がグラーム集団と関わりの深い奴隷軍団やマワーリー軍団の起源を緊急時における家内集団の武装に求めているのはきわめて重要な指摘である [嶋田 1996: 363-376]。さらに、この問題はイエにおけるハーディム khādim と呼ばれる宦官の社会機能、さらには非奴隷身分軍人の私的軍事集団への組み込みの問題とも関係しよう。その際「グラーム」の呼称が、社会の多様に異なった職能集団に適用されていることを前提としつつ、その全体を緩やかに包摂するグラーム概念の在り方を社会の文脈において描き出すこともまた、本稿の目的となろう。

## I グラームとイエ

中世アラブ世界のイエは基本的に拡大家族であり、家長を中心として、その直系の息子たち wuld とその家族に加え、家長の兄弟とその家族といった血縁集団全体 ahl bayt, さらに彼らに対して従属関係にあるマワーリーやグラーム、そしてこのようなイエを管理する侍従 ḥājib, 使用人 ḥāsiya, 家僕 hasham, 書記, 会計などの幅広い集団から構成されていた [嶋田 1996: 368-369; 佐藤次高 1986: 60-63]。このうちには家長らと擬制の血縁関係を形成することによってイエの構成員となるマワーリーやグラームなどの者だけでなく、個人的な書記などのように自由身分のままイスティナーと呼ばれる引き立て / 恩顧の授与によって家長との関係を結ぶ者もあった<sup>3)</sup>。

後に大宰相となったイブン・アルフラート Ibn al-Furāt は書記官だった頃に、兄のアブー・アルアッバース Abū al-'Abbās とともに、徴税請負人のナルスィー家 al-Narsiyūn と対立した。そこでナルスィー家の人々はイブン・アルフラート兄弟ふたりの「書記たち、会計係たち khuzzān-humā, 侍従たち、ふたりの館のグラームたち ghilmān-hā, 下僕たち al-farrāshūn, 執事たち al-qahramāna, ふたりの「奥」(ḥuram-humā 妻妾を中心とするプライベートな空間)の支出を担当する者」を買収したので、ふたりの公務も私生活もナルスィー家に筒抜けになっていたという [Wuzarā': 193-194]。ここではグラームが有力な書記のイエを管理する集団の一部をなし、主人の公私にわたる生活を支える重要な構成員であったことをみることができよう。彼らとならんで個人的な「書記、会計」がイエの一員として現れることは、主人である有力書記官が私領地を含む大規模な家産を保持し、これをイエとして管理する必要性があったことを示している。

3) マワーリーとワラー及びイスティナーの性格とそれに関する先行研究については [清水 1999] を参照のこと。特に奴隷と主人の擬制血縁関係に関しては [Forand 1971] に詳しい。

このような家産管理全体が時にグラームに一任されることもあった。時代はさかのぼるが、第10代カリフ・ムタワッキルに財産を没収された元宰相イブン・アッザイヤート Muḥammad b. al-Zayyāt のバグダード別邸の執事 qahramān-hu は、彼のグラーム ghulām-hu であるルーフ Rūḥ であった。ルーフは、もともと商人であったイブン・アッザイヤートの財産を任せられ商売を代行していた。イスラーム世界においては、奴隷は往々にして主人の職業上のパートナーとなり、商売などを任せられることがあった。この場合の稼ぎは限定的ながら、奴隷の私有財産となり、奴隷はこれを貯蓄して主人から自分を買い戻すことも可能である [柳橋 1998: 457]。ルーフはこの極端な例であり、主人である元宰相が政治首都サーマラーにあって政務を司るあいだ、経済の中心地であるバグダードの別邸を預かって主人の本業である商売を切り盛りしていたのである。

グラームが行ったのは商売だけではなく手工業の場合もあった。カリフ・マームーンの書記ファラジュ Faraj のグラームであったナスル Naṣr は、ターバンの芯となる帽子づくりを得意としており、他の書記官の注文に応じて帽子を作成、納品して代金を得ていた [Rusūm: 43]。こういったグラームの仕事は単なる内職ではなく、主人の監督の下に従事していたものと思われる<sup>4)</sup>。

グラームは、宰相や政府高官のような有力者のイエだけでなく、多少とも生活にゆとりのある階層では広く一般的に使用されていた。

ヒジュラ暦 282 年 / 895-6 年に死亡した文人アブー・アルアイナー Abū al-‘Aynā’ は、出身地バスラを離れた理由がグラームにあったと語っている [Muntaẓam 5: 158-160]。彼はバスラで一人のグラームを 30 ディーナールで購入したが、そのグラームは預った金を勝手に使ってしまったり、主人の親戚に主人の行動を告げ口するなど困った振る舞いが目立った。そこでアブー・アルアイナーはこのグラームを解放して放逐しようとしたが、かえって居座られ、巡礼費用や聖戦 ghazw への出陣費用をせびりとられた。これに懲りたアブー・アルアイナーは、このグラームが聖戦に出かけている間に家財を処分してバグダードへ夜逃げしてきたのだという。

これは、イブン・アルジャウズィー Ibn al-Jawzī が、アッバース朝の宮廷官僚にして高名な文人アブー・バクル・アッスーリー Abū Bakr al-Ṣūlī を情報源として伝える記事である。多分に逸話的な要素があり、もとより事実性の確認をとることはできない。しかし、一般人とその使用人としてのグラームの関係をコミカルに伝えており、社会生活のなかでグラームが非常に卑近な存在であったことを知るができる。彼らは、主人の代理として所用をこなし、主人の親戚と交わり、奴隷身分から解放された後も主人と同居して密接な関係

4) このグラームは、ある時ファラジュの指示に従って、買い手を畏にはめるため帽子に十字架を仕込んだ。ファラジュはこれを告発することで買い手に背教者の罪をきせようと企んだのである。

を築いていた。

名家の子弟ともなれば、遊興の際にも複数のグラームを伴った。イブン・アルフラートは、まだ書記にも任官していなかった頃に果樹園に遊びに出たところ、若者たちに絡まれているひとりの書記を救い出すこととなった。彼は自分のグラームたちのひとり *aḥad ghilmān-nā* を下馬させ、この書記をそれに乗せて同行を求めたという [Wuzarā': 162]。青年イブン・アルフラートのグラームたちは、徒歩ではなく騎馬で主人の供をしていたのである。

このようなグラームは、主人にもっとも近い存在であった。カリフ・ムータシムに反乱を起こしたバーバクが敗れ去ったとき、家族も失いたった一人で逃げのびたバーバクに付き従い、彼の食料のために奔走したのは彼のグラームであった [Ṭabarī III: 1190]。また主人が何らかの理由で捕縛された場合、差し入れなどで身の回りの用事を務めるのもグラームである。284/897年にジバル地方の支配者アブー・ドゥラフ Abū Dulāf 家のハリス Ḥārith が、兄弟のウマル 'Umar に囚われた際にも、ハリスに仕える年少のグラームがおり、ハリスはこのグラームが隠し持っていた短剣を用いて脱獄を敢行したという [Ṭabarī III: 2180-2182]。カリフ・ムータッズが兄弟のムワイヤドとともに囚われの身となったときにも、ふたりの身の回りの世話をするグラームがつけられていた [Ṭabarī III: 1545]。その一方で、逆に近しさのあまりに、グラームが主人に叛意を持ったときは主人の身の安全は心許ないものとなる。一時イランで勢威をふるったアフマド・アルフジスターニー Aḥmad al-Khujistānī は、金庫番のグラームと酒席担当のグラームの恨みをかい、酔いつぶれているところを殺害されてしまった。このとき、彼の部下たち *aṣḥāb-hu* は散会したあとであった。グラームは主人にとって部下よりも近く、また部下たちにとっても無警戒な存在だったのである。

グラームと主人の近しさはグラームの性的役割とも関連があった。戦国時代から江戸期前半の日本では男性の同性愛はきわめて当たり前の性の在り方であったが [氏家 1995]、中世西アジア世界においてもこの点については同様である。475/1082-1083年にズィヤール朝君主カイ・カーウス Kai kā'ūs b. Qābūs が息子に対する教訓の書として執筆した『カーブース・ナーマ』では、「恋愛」について論じる際、美しいグラームに対する愛が女性に対する愛と等しく論じられている [Qābūs: 83-85; 黒柳 1969: 59-61]。また彼は「性の愉しみ」について語る際には「女と若者（グラーム）のいずれの性に片寄ってもならぬ。」と息子を戒め「夏には若者、冬には女をかわいがれ」と忠告するが、これはグラームとの性行為を奨励していることに他ならない [Qābūs: 86-87; 黒柳 1969: 62]。このようにグラームとは主人である男性の愛と性の対象であった。この点については、宦官とグラームの近縁性との関係で次節でまたふれたい。

グラームは主人の「手」でもあった。地位の高いもの同士が金品のやりとりをする場合、本人たちが直接受け渡しをするのではなく、互いのグラームを介して授受が行われることがあった。徴税請負人ナルスィーが書記官イブン・アルフラートに仕える書記の一人を買収し

ようとしたときには、直接本人同士が面会しているにもかかわらず、ナルスィーのグラームが金袋をこの書記の面前に差し出している。これに対して買収を拒んだ書記は、ナルスィーが立ち去ったのちに、この金袋を自分のグラームを通じて返却させているが、このときこれを受け取ったのも、ナルスィーのグラームであった [Wuzarā': 192-193]。結局、主人同士は一度もこの金袋に触れていない。また、書記官が外出する際にインク壺や用紙を携行するのもグラーム（時にはハーディム）の役割であった [Wuzarā': 195; Rusūm: 43]。彼らは筆記用具が必要となるような交渉や契約の場に付き従い、必要な時にはすぐにそれを差し出したのである。このような場合には彼らは主人の手の延長であり、非人格的な存在であった。

また財産としてのグラームという面に着目するならば、グラームはどれほど高い地位を築こうとも、主人の一存で売却される可能性があった。ムータディドの治世でも、侍従であったグラームが職務怠慢のため売却を検討されている [Muntaẓam 6: 97]。前述のイブン・アッザイヤートの執事ルーフはカリフの財産没収にさいして、商品である小麦、大麦、小麦粉、種子、油、オリーブ、無花果などととも彼自身も没収対象となっている。ルーフもまた奴隷であるが故にイブン・アッザイヤートの所有物として扱われたのである。サーマッラーの本邸の「家財、馬匹、ジャーリヤたち jawārin (女奴隷 jāriya), グラームたち ghilmān」もこのときの没収対象となっており、これらは宮廷に運ばれて売却されたという [Ṭabari III: 1374, 1376]。

このようなイエのグラームたちが暴力行為と関わることもあった。319/931年、バグダードの騎兵たちが俸給を求めて宰相スライマーン・ブン・アルハサン Sulaymān b. al-Ḥasan の館の前で騒ぎ始めると、彼らに向かってスライマーンのグラームたち ghilmān-hu が館のもっとも高いところから焼き煉瓦を投げつけ、幹部のひとりを殺害してしまった。これがきっかけとなって、騎兵たちは館を襲撃し、スライマーンは裏口から逃げ出さざるを得なくなった [ʿArib: 156-157]。アッバース朝においても、嶋田氏の指摘するように、家内集団であるスライマーンのグラームは館の危機において緊急避難的に暴力を行使したのである<sup>5)</sup>。

## II イエにおけるハーディムとグラームの類縁性

さて、アッバース朝における最大のイエはカリフ宮廷であった。軍事力と官僚体系に支えられたアッバース朝政府には、その中核にアッバース家の血縁家族を構成員とするイエが存

5) 管見の限り、後述するハーミド・ブン・アルアッバース以外の宰相が私的軍事集団としてのグラーム軍団を形成していた例を知らない。スライマーンのグラームもまた、これ以外の戦闘例のないところから家内集団であると考えらるべきであろう。

在していた。国庫が、国家運営に用いられる公国庫 *bayt al-māl al-‘amma* とカリフ家の私的な家計である私国庫 *bayt al-māl al-khāssa* に分かれていたことはその事実を端的に示している [Mez 1922: 113; Mez (tr) 1937: 120; Løkkegaard 1950: 157-158]。カリフの家産は国家財政と不可分な側面も存在したが、それでもアッバース家親族の私領地や天領に相当するカリフ特別徴税区も存在した [清水 1998: 39]。カリフの妻妾や王子たちの生活する「奥 *ḥurum*」には、独立した会計が存在し担当の執事や書記がこれを運営した<sup>6)</sup>。カリフ・ムクタディルの母方の兄弟に当たるガリーブ・アルハール *Gharīb al-Khāl* のように、「奥」との血縁関係で政治的影響力を持つに至る人々も存在していたのである<sup>7)</sup>。また、カリフ宮廷のイエとしての性格は、国家予算にカリフの親族（現カリフ以前のカリフたちの子孫たちなど）の生活費が計上されており、宮廷がアッバース家の拡大家族であったことから明確に窺うことができる [Wuzarā’: 25]<sup>8)</sup>。

カリフの宮廷は、まさしくイエの形態を巨大な規模で踏襲している。血縁や婚姻を中心とした核的親族集団はもちろん、宮廷を構成するハーディム、書記、侍従、グラームなどの諸集団は、イエを構成する要員に等しい存在である。ウマイヤ朝中期からアッバース朝にかけてカリフの周辺に様々なかたちで現れるマワリーは代表的な公的擬似血縁親族であるが、アッバース朝カリフ・マンスール以降は「カリフ側近」とほぼ同意で用いられることになる。そして、カリフ・ムータスィムが創設したトルコ系奴隷軍団はグラームと呼ばれていた。カリフの宮廷においては、イエの諸構成要素がそのまま存在すると同時に、その巨大化と公的性格ゆえに少しずつ変質した様相を帯びるのである。

カリフが実質的な権力を喪失していたサーマッラー時代後期のカリフ・ムクタディールは、

6) ラシードの母ズバイダ *Zubayda*, ムータディドの女奴隷フェリーダ *Farīda*, ムクタディルの母サイイダ *Sayyda* など、カリフの妻妾たちが私領地を与えられる例は数多い [Wuzarā’: 202; 清水 1998: 50, 62]。特にサイイダには「サイイダ私領庁 *diwān ḍiyā’ al-Sayyda*」が存在し、その長官はサイイダの女性執事官 *qḥramāna* によって任命されていた [Miskawayh 1: 143]。

7) アッバース朝の国家運営に大きく関わったガリーブやその息子ハールーン *Hārūn* の他、おそらくガリーブの姉妹（すなわちムクタディルの母の姉妹）であろうと考えられるハアラ *al-Khāla* も「彼女の私領庁 *diwān ḍiyā’-hā*」をもっており、専属の書記が存在していた。そのひとりアブー・アルハサン *Abū al-Ḥasan Zakaryā* は、ハールーンの書記イブン・シールザードの兄弟であり、ここに「奥」の血縁集団とその財産管理集団の密接なつながりをみることができ [Miskawayh 1: 162-163]。

8) アッバース朝の財政に関しては [Mez 1922] のほか [von Kremer 1888] [森本 1975] を参照のこと。また [Hoenerbach 1950] [Busse 1967] は、これらでも扱われている 280/893-894 年度の国家予算表 [Wuzarā’: 15-27] についての研究である。この国家予算表には数多くのグラームたちの俸給に関する記載が存在し、宮廷におけるグラームの在り方を考えるうえで重要な情報を提供している [Forand 1962: 85-103] [清水 1990: 26-27]。ただし、余部氏がこの記事の一部を根拠としてムータディドのグラーム *al-ghilmān al-mamālik al-sittīniya* が奴隷であることを否定的に捉える点などには賛成しがたい [Amabe 1995: 224]。

権力を掌握したアトラーク軍人を批判して以下のように述べている。

私は、我が子ら wuldī や我が家族 ahli に具の入っていない食べ物を食べさせ、また我が子らの誰もが、身を隠す程度のものしか着ていない。神かけて、私があなた達のことを担って以来、自分や、我が家族や、我が子らや、我がグラームや我が家僕の主立ったものたち mutaqaddimī ghilmānī wa ḥashamī のために、1万5,000 ディーナール以上を費やしたことはない。[Ṭabarī III : 1797]

ここからもカリフ宮廷の最低限の構成要員がイエの要員そのものであり、盛時のカリフ宮廷が、そのイエの拡大したものであることを読みとることができるであろう。このような性格はカリフ宮廷だけでなく、その小型版である各地方支配者の宮廷にも再生産される。そして、ムフタディーの言葉が戦闘グラーム集団である「あなた達」アトラークに対して述べられていることを考えれば、そこに言及される「我が」グラームは軍事要員とは考えがたい。彼らは「子ら」「家族」「家僕」と並ぶ、イエの構成員である。

同様にカリフ・ムタワッキルがアトラークに襲撃を受け暗殺された際に、話し相手 julasā' や飲み友達 nudamā' といった主としてウラマーを中心とする文人とともに、グラームたちが逃げまどっていることに注目したい [Murūj 4 : 139]。彼らは、アトラークに攻撃されていることから、アトラークの一員であったとは考えられず、それどころか外敵に対して戦う努力もしていない。すなわち、これらのグラームは親衛隊などの戦闘要員ではなかったと思われる。このときムタワッキルを護る努力をしたのは、彼の腹心ファトフ・ブン・ハーカーン Faṭḥ b. Khāqān のみであった。

一般にサーマッラー時代のグラームとしてはアトラークばかりが論じられるが、実際に宮廷にはアトラーク以外の系統の、単なる家内集団としてのグラームも存在し続けていたのである。カリフ・ムスタインの死を見とったグラーム達が、アトラークを自分達と対立する者として伝えていることも、この傍証となるであろう [Ṭabarī III : 1671]。

さて、宮廷の家内集団としてグラーム以上に注目されるのがハーディム khādim である。ヒラルル・アッサービー Hilāl al-Ṣabī の『宮廷典範』に拠れば、カリフ・ムクタフィー時代の宮廷構成員は

- a) 宮廷のグラーム ghilmān dāriya…… 2 万名
- b) ハーディム (黒人およびサカーリバ<sup>9)</sup>) khādim sūd wa ṣaqālība…… 1 万名

9) サカーリバとはスラヴ系の奴隷のことであり、黒人と同様に宦官が多いことで知られている。[Ayalon 1979; 92-124] は [Ḥawqal: 110] に基づいて、ホラーサーンで捕らえられたサカーリバは去勢されずにマシュリクにおいて奴隷として用いられるが、アンダルス経由で輸入されるサカーリバは去勢されるとする。アヤロンは、現実には去勢されずにマシュリクで奴隷として用いられたサカーリバはごく少数であり、史料にあらわれるサカーリバは事実上すべてがアンダルス経由の宦官であると主張している。アンダルスの宦官については [佐藤健太郎 1992: 77] が、ファターと呼ばれる宦官とグラームの関係について、ファターがグラームの指揮権を握っていた例のあることを論じている。

次のムクタディル時代は

- a) ハーディム khādim…… 1万1千名
  - 内, 1) 黒人 sūd…… 7千名
  - 2) サカーリバ ṣaqāliba…… 4千名
- b) 自由身分 ḥurra か 奴隷身分 mamlūka の女性 imra'a…… 4千名
- c) フジャリーヤのグラーム al-ghilmān al-ḥujariya…… 数千名
- d) 宮廷の警護要員
  - 1) 戦列歩兵 al-rajjāla al-maṣāffīya…… 5千名
  - 2) 警備兵 ḥarrās…… 4百名
  - 3) 下僕 farrāshūn…… 8百名

であった [Rusūm: 8-9]。フジャリーヤとはムータディドが購入したトルコ人奴隷軍団であり、ウスターズ ustādh と呼ばれる宦官 khādim の監督下におかれた。その名の由来は、彼らがカリフの「フジャル hujar (部屋)」で養育されたことによる [Wuzarā': 17]。一方、ムクタフィー時代の宮廷のグラームが純然たる軍事集団であるか家内集団を含むかは、ムクタディル時代の武装勢力が合計しても1万名程度であることを考えると確言ができない。ムクタディルがクーデターによって廃位されかかったとき、宮廷で彼を護って戦ったのは「宮廷のグラーム ghilmān al-dār」であった [Ṭabarī III: 2282]。しかし、同時にハーディムもまた彼らとともに戦っているものであり、この事件は状況からいっても緊急時における家内集団の武装に相当するとも考えられる [Miskawayh 1: 6; Wuzarā': 100]。

さて、一般的にハーディムはその語源の通り khadama するもの、すなわち使用人である。一方ハーディムには婉曲表現としての「宦官」の意味が存在した。アッバース朝宮廷のハーディムがどの程度まで宦官を意味するかについては、そのほとんどが宦官であったとする D・アヤロンを最右翼として見解の分かれるところである<sup>10)</sup>。実際に少なからぬ宦官が存在したことは確かであり、アヤロンの掲げる事例からは、ハーディムの語が自動的に宦官を意味する状況が実際に存在したことが窺われる。また後の時代に成立した史書には、カリフ・ムクタディルの「宦官ハーディム al-khādim al-khaṣī」1万名と記載する例も存在する [Muntaẓam 6: 70]。著名なハーディム将軍であるムーニスは成人しても決して髭が生えないとされていることから、宦官であることは間違いない [Miskawayh 1: 160]。その一方で、サージーヤ軍団のあるハーディムは妻帯しており、妻を後宮の執事官 qahramāna の職に就かせている [Kāmil 8: 258]。このようなハーディムの妻帯例を、宦官の去勢された

10) アヤロンは、従来の研究者はハーディムが宦官であることを過小評価していると批判し、数多くの例証を用いて、ハーディムの語が宦官と同義で用いられていたことを示した [Ayalon: 1979]。これに対してシェイフ・ムーサーは、アッバース朝初期にはハーディムは単なる使用人以外を意味しないと反論した [Moussa 1982]。この論争はアヤロンの再反論 [Ayalon 1985]、ムーサーの再々反論 [Moussa 1985] と続いたが、[Jawāri] を用いた [Ayalon 1985] の議論はきわめて説得力があり、少なくともアッバース朝初期にハーディムの語が事実上宦官を意味することがあったのは確実であろう。



悲しみを和らげるためであるとするアヤロンの見解ははなはだ説得力に欠ける [Ayalon 1985: 306 n. 64]。事実、宰相を歴任した著名な政治家アリー・ブン・イーサー ‘Alī b. ‘Īsā もハーディムと呼ばれることがある [Rusūm: 61]<sup>11)</sup>。このことからすれば、ハーディムを宦官と完全に同一視することもできない。この問題については、後にもう一度ふれたい。

宦官ハーディムはほとんどのグラームと同じく奴隷身分出身であった。しかし、同時に重要なのは、家内集団としてのグラームとハーディムの職務に共通する部分がみられることである。

上記のムクタフィーの宮廷構成では、グラームとハーディムのみが主要な要員として述べられている。同様に宮廷におけるハーディムとグラームという組み合わせは、ムータディドが気分を害している様子を見て「ハーディムは皆逃げ、グラームは皆どこかへ行ってしまった」という例や、ムクタディルが要人と会見する際に「グラーム達やハーディム達を人払いした」という例などに散見される [Murūj 4: 285; ‘Arib: 49]。また先述のように書記のインク壺や用紙を携帯する役割を担うのもグラームやハーディムであった。

さらに興味深いのは、ムータディドのグラームであったバドルが、グラームだけでなくハーディムの統括も行っていることである。バドルは「ムータディド軍の主人 *ṣāhib jaysh al-Mu’taḍid* であり、彼の事業 *amr-hu* を任されており、彼のハーディム達や彼のグラーム達 *khadam-hu wa ghilmān-hu* に従われている」と言われる立場にあった [Ṭabari III: 2209]、しかも彼らの業務を統括するバドルは、宰相ではなく、将軍であった。

実は、グラームと同様、ハーディムにも一定の軍事性が認められる。

後述のように、ヤーニス・アルムワッファキーのイエには「選抜かれた騎兵、グラーム、ハーディムの兵士 1,000 名 *khiyar al-fursān wa al-ghilmān wa al-khadam alf maqātil*」が常駐していたという [‘Arib: 115]。余部氏はハーディムの軍事活動について指摘し、多くのハーディムがグラームを率いたり、グラームを所有していたことを明らかにしている [Amabe 1995: 229–231]。ムクタディルに対するイブン・アルムータツズ *Ibn al-Mu’tazz* のクーデターに際して、グラームとハーディムは宮廷を守るためにともに戦ったのみならず、ムニス・アルハーディムがジャーリヤを率いてチグリスから船で出撃し、クーデター軍の本隊を撃滅している [Ṭabari III: 2282; Miskawayh 1:6]。このように、ハーディムの職務はグラームとの組み合わせで、軍事的な色彩を帯びることがあるのである。ここにも、ハーディムとグラームの親密性をみることができる。

さて宦官ハーディムは、男性であるグラーム、女性であるジャーリヤと対比された場合、「第3の性」として認識されていた。ジャーヒズのエッセイ「ジャーリヤとグラームの美点

11) カリフ・ラーディーがアリー・ブン・イーサーを財産没収のために監禁した際に、イブン・ラーイク *Ibn Rā’iq* の書記官シルヒー *al-Ṣilḥī* がアリーの仲介役としてラーディーに直訴し、「彼はあなたのハーディム *khādim-ka* であり、あなたの父祖のハーディム *khādim ābā’-ka* であります」と語って、寛大な処置を求めたという。

の書」は、性的な対象としてジャーリヤに対する愛好を主張する女色賛美者とグラームに対する愛好を主張する男色賛美者がそれぞれの立場を主張する内容である [Jawāri]。このなかでジャーリヤ愛好者が、古来ジャーリヤへの恋のために死んだものは数多く、そのなかには有名な Kuthayyr, Jamal, 'Urwa などがいるが、グラームへの恋のために死んだものはいないと指摘したのに対抗して、グラーム愛好者は以下のように応えている [Jawāri: 104-105]。

もし Kuthayyr, Jamal, 'Urwa, その他あなた [ジャーリヤ愛好者] が名を挙げたような者たちが、当代の人々のハーディムたち、特に高額で購入された者たちを目にし、彼らがいかに機敏で見目がよく、肌色が薄く、均整がとれており、体つきが美しいかをみたならば、[彼らの想い女である] Buthayna, 'Azza, 'Afrā' を山上から投げ捨て、犬ころ同然にうち捨てようと思ったことであろう。

さらにグラーム愛好者は、ジャーリヤ好みは粗野な遊牧アラブの古習であり、彼らは洗練された優雅さを知らなかったのであると主張する<sup>12)</sup>。

これに対してジャーリヤ愛好者は、グラーム愛好者が宦官 *khaṣī* を話題に持ち出すのは趣旨にあわないと抗議しつつも、「男でも女でもない *laysa bi rajl lā imra'a*」宦官好みについて論じるのである [Jawāri: 123-124]。

ここでは、宦官愛好はジャーリヤ愛好やグラーム愛好と並ぶ第3の性への嗜好と明確にとらえられている。また、アヤロンはこの箇所を、ジャーヒズがハーディムの語を宦官の意味で用いていることを証明する最有力の傍証として挙げており、その議論は非常に説得力の高いものである [Ayalon 1985: 291-294]。すなわちハーディムの語は、少なくともグラームやジャーリヤと対比して用いられている際には、宦官という第3の性を表す言葉として一般に理解されていたと考えられる。そして、ジャーヒズがジャーリヤ愛好者とグラーム愛好者に非常に赤裸々に語らせているように、グラームとハーディムは、女奴隷であるジャーリヤと同レベルで性的な嗜好の対象であったのである。ちなみにジャーヒズによれば、男奴隷であるグラームが性的対象となるのは10歳ころから髭の生えるまでの年齢であり、髭が生えた後も脱毛などの手段でごまかして男性の相手をすることはあったが、それは醜悪なことと捉えられていた [Jawāri: 122]。その意味では、グラームが性的魅力を喪失するのは、戦闘能力を発揮できるようになる年齢とちょうど同じ頃である。少年愛の対象としてのグラームと戦闘員としてのグラームのそれぞれの性格を考える上で興味深い点である。

このようなグラーム愛好、宦官愛好的性向は支配者たちといえども無縁ではなかった。

ズィヤール朝君主がグラームと性的交渉をもっていたことは『カーブースの書』から明らかである。一方、366/976-977年にブワイフ朝大アミールのバフティヤール Bakhtiyār は、

12) 近世日本の男色には戦士集団の結束との関連性が強く、古代ローマにおける男色は男性至上主義的な側面があったが、ジャーヒズが主張する男色の美点は、都市性、文明性にある [氏家 1995: 153; 本村 1999: 106]

お気に入りのトルコ人グラーム *ghulām turkī* が戦場で捕虜になったことを大いに嘆き悲しみ、食事もとらずに泣き続け政務を放棄した。結局、彼はこのグラームをリュート弾きのジャーリヤ2人と交換に取り戻したが、このジャーリヤたちは以前1人を1万ディーナールで売ることすら断ったという優れた名手たちであった [Muntaẓam 7 : 83-84; Miskawayh 2 : 371-372]。この事例では、戦場で戦うグラームが、高価なジャーリヤと同様に扱われている点で非常に興味深い。戦うグラームもまた主人の愛 *maḥabba* の対象となり得たのであり、それはジャーリヤに対するものと同じ性格のものであった<sup>13)</sup>。

またカリフ・ラシードの母ズバイダは、息子がハーディムばかりを寵愛していることを知ると、見目麗しい女奴隷たち *jawāri* に男装をさせて送りつけたので、ラシードは彼女たちに夢中になったという [Murūj 4 : 357-358]。ズバイダの行為は明らかに嫡子の誕生を計算に入れた息子の性の管理という側面をもっている。そして彼女たちは「女グラーム *ghulāmiyāt*」と呼ばれた。このことはグラームや宦官、ジャーリヤの性が如何に曖昧であることをよく示しているといえよう<sup>14)</sup>。このようなグラームの在り方はまた、カリフによって戦闘要員として養成中のグラームが、後宮の女性たちと同じく宦官の監督下におかれたことから知る事ができる。

以上を総合的な視野から眺めて浮かび上がるのは、やはり、宮廷を含めたイエにおける、グラームと宦官ハーディムの職能的な近縁性である。確かにグラームには性徴を迎えた上で軍事に特化する者が数多く存在し、宦官ハーディムには女性やグラームの性を管理するという職能的な偏りがみられる。しかし両者はともに主人にもっとも近い存在として側に控え、寵愛を受け、家産の管理と軍事の両面に関わる存在であった。両者は一体的な存在として扱われることが多く、イブン・アルムータZZの反乱ではともに武器を取って宮廷を護り、ムータディドの時代にはともに将軍バドルの管轄下であって、国家の運営に関わった。フジャーリヤのグラームを監督するのは宦官ハーディムの役目であったが、後にその1人と思われるムニス・アルハーディムはフジャーリヤを率いて転戦し、結局はカリフに対するクーデターを起こして、事実上の大アミールとして国政を掌握したのである。その姿は、アトラク・グラーム軍がムタワッキルを殺害して権力を壟断した姿を彷彿とさせる。

このように奴隷身分のジャーリヤ、グラーム、宦官ハーディムのうち、特にグラームと宦官ハーディムは職能的にきわめて近い部分を持ち、その違いは主に「性的区別」であったであろう。すなわち、ハーディムという一般用語は、奴隷身分出身のグラームと対比して用いられた場合、もっぱら奴隷身分出身の宦官を意味し、両者には一定の「性」による分業がみられつつ、共通する職能を担う部分が存在した。そして、その職能は、イエ（宮廷）を支

13) 捕虜となる以前は、彼に対して愛 *maḥabba* を示してはいなかったという [Miskawayh 2 : 371]。

14) ジャーヒズはグラーム愛好者の言葉を借りて、ジャーリヤの美を讃える際に「まるで彼女はグラームのようだ *ka anna-hā ghulam wa waṣīfa ghulāmiya*」という表現がある、と述べている。

える家産管理機能と軍事機能の双方に関わる、もしくは双方を横断する性格をもっていたと考えることが可能なのである。

宮廷などで家産管理に関する数多くのグラームの存在や、少数ながら軍事勢力として武装するハーディムの存在する背景には、このような両者の「職能」の共通性の問題が横たわっていると考えられるであろう。

### Ⅲ 軍事集団としてのグラームの広がり

既に論じたことのあるようにムータスィムによるグラーム集団アトラークの購入は、中央アジア西部ソグド地域の地方支配者が領民を率いてムータスィムの指揮下に入ったのと軌を一にした動きである [清水 1990: 4-10; 清水 1999: 229]。ムータスィムはこの新軍団によって、対バーバク戦や対ビザンツ戦を戦ったのであり、彼らの軍事集団としての性格に疑いはない。

彼らはムータスィムの死後、自分たちに敵対的なムタワッキルに対してクーデターを起こして政治の実権を掌握し、バグダード包囲戦などの戦場を戦った。

一方、カリフ・ムータミドの兄弟ムワッフアクは、アトラークと良好な関係を保ちつつ、新たに自らのグラーム集団を形成し、彼らを中心として対ザンジュ戦、対サッフアール朝戦を戦った。彼のグラーム軍にはエジプトやメッカから購入した黒人奴隷兵が多く存在したことが特徴である。ムワッフアクの息子ムータディドがカリフに即位し、アトラークの勢力を押しやてバグダードに強力なカリフ政権を復活させたのも、父のグラーム軍の存在を抜きに考えることはできないであろう [清水 1990: 26-28]。

このように、職業軍事集団としてのグラーム軍団は、ムータスィム以降のアッバース朝史において中心的な役割を果たしたといつてよい。この動きは社会全体に広まり、主人を結集核とする私的な軍事集団の形成の動きが、各地で認められるのである。

トゥールーン朝やサーマーン朝に大規模かつ体系的なグラーム軍団が存在したことはよく知られている。298/910-11年にサーマーン朝のアフマド・ブン・イスマーイーール Aḥmad b. Ismā'il はムクタディルに様々な贈り物を送ったが、そのうちのひとつとして120名の武装し騎乗したグラームがあった [Muntazam 6: 97]。軍事能力に特化した奴隷は、サーマーン朝の名産品だったのである [佐藤圭四郎 1959]。

しかし、これらと同時に注目すべきは徴税請負人ハーミド・ブン・アルアッバース Ḥāmid b. al-'Abbās のグラーム軍団である。306/918年に宰相に任命されたワースィトの徴税請負人ハーミドは、それ以前に「彼のグラームたち ghilmān-hu と人々」をシーア派鎮圧に派遣するなど、強大な軍事力を有していることで知られていた [Arib: 55]。さらに

- ① (ワースィトの) ハーミドの許には400名の上級のグラーム ghulām kibār とそれに従う者たち、700名の歩兵が居り、さらに彼に味方し党派を組む ta'aṣṣub 土地の者がいる

[Wuzarā': 41]

- ② 彼は裕福で 400 名の武装した奴隸 *mamlūk* をもち、そのひとりひとりに奴隸がついていた。また彼には 1,700 名の侍従 *ḥājib* がいた。[Muntaẓam 6 : 180]
- ③ (宰相拜命のため) すぐに出頭するようという、ムクタディルの書が届いたことが明らかとなり、ハーミドはトランペットを吹き鳴らし、彼の書記 *kuttāb-hu*, 従者 *ḥawāshī-hu*, グラーム *ghilmān-hu*, 歩兵 *rajjālāt-hu* を伴って都に上った [Wuzarā': 41-42]

などと史料にはいわれている。ハーミドのグラーム軍は、バグダードで宰相に任じられていた期間にも、彼の私兵として活動を行っている [‘Arīb: 31; Miskawayh 1 : 79, 81]。

単なる徴税請負人が、カリフの膝元のワースイトで私的な軍事力を形成していること自体、すでに解体期のアッバース朝が軍事力を中心とする割拠の時代に入っていることを示す。そして、その軍事力形成が武装グラーム集団というかたちをとっている事実は、遊牧民やアラブ部族のような半軍事集団とは無関係に、もっぱら財力のみを武器として自らのイエを軍事的に拡充する在り方が、選択肢のひとつとして急速に一般化しつつあったことを意味するのである。

ハーミドほど極端な例でなくとも、地方の有力者は西暦 10 世紀前半までにはグラーム集団による武装を急速に進めつつあった。279/892-3 年にホラーサーン総督を罷免されたラーフィー・ブン・ハルサマ *Rāfi' b. Harsama* は 4,000 名のグラームを所有して *yamluk* おり、これは、歴代のホラーサーン総督としては前例のない規模であったという [Kāmil 7 : 458-459]。彼は同年ニーシャーブールを狙ってサッファール朝のアムル・ブン・ライスと戦ったが敗戦し、この結果「彼の部下 *aṣḥāb-hu* や彼のグラーム *ghilmān-hu*」は彼を見捨てた。これらのグラームが軍事行動に参加していたことは間違いがない。また既述のごとく、ジバル地方を数代にわたって支配したアブー・ドゥラーフ家のハリスがウマルに囚われた際には年少のグラームが付き従っていたが、彼が囚われた砦にはアブー・ドゥラーフ家のマウラーであるハーディムのシャフィーウ *Shafi' mawlā-hum* がウマルのグラームたち *ghilmān* ‘Umar と精鋭たち *khāṣṣa-hu* を率いて配されていた。また後のハムダーン朝の礎を築いたタグリブ族出身のハムダーン・ブン・ハムドゥーン *Ḥamdān b. Ḥamdūn* は、272/885-6 頃には既にマールディーンを支配していたものと見られるが、282/895 年、ムータディドに攻撃を受けカリフの軍門に降っている。この降伏時の記事の中にもグラームの記述が認められる。

ムータディドはハムダーンの拘留および彼の従者達の捜索に馬を出すことを命じた。こうしてムータディドはハムダーンの書記を捕らえ、またハムダーンの親族や彼のグラーム達 *ghilmān-hu*, クルドの首長達に従う者その他の多くは安全保障 *amān* を得た。

[Ṭabari III : 2145]

また、320/941-2 には

彼の軍営地に、イブン・ハムダーンのグラーム達と彼の歩兵の多くが行った。またアブー・アルアラー・ブン・ハムダーン Abū al-‘Alā’ b. Ḥamdān, アブー・アッサラーヤー・ブン・ハムダーン Abū as-Sarāyā はバグダードへ御上に援軍を求めに向かい、フサイン・ブン・アブドッラー・ブン・ハムダーン Ḥsayn b. ‘Abd Allāh b. Ḥamdān はマウラサーヤー山脈へ分かれた。彼の許にそこで彼のグラーム達 ghilmān-hu の一部や彼の民のグラーム達 ghilmān ahl-hu が集まった。

この様に、282年にはハムダーンのグラーム達の軍事集団性は明確でないのに対し、それから50年後には明らかに軍団として用いられている。更に興味深いのは後者において「彼のグラーム達」と「彼の民のグラーム達」が集合していることである。彼の民 ahl-hu の実態は彼の親族などの家内集团的な人々である可能性が高く、その意味ではハムダーン家の内部においても、それぞれの個人が私的軍団を形成する傾向にあることを示しているとも考えられる。

アゼルバイジャンを支配したアブー・アッサージ Abū al-Sāj 家は、ムータスィムの新軍団の武將アブー・アッサージがディヤール・ムダル、ディヤール・ラビーウ、キンナスリーン等の諸地方を手中に収め、彼の死後、息子ムハンマドがアゼルバイジャン地方にその支配を確立した。彼は出身地ウシュルーサナの王の伝統的呼称であるアフシーン Afshīn の名で呼ばれていた。その経緯は、エジプトに派遣されたアトラーク部将が独立したトゥールーン朝と類似している。彼らのグラーム集団は、アブー・アッサージ家が半独立的支配を確立していく過程で形成されたと考えるべきである。288/901年、ムハンマド死去した際には「彼のグラーム達 ghilmān-hu や彼の部下達 aṣḥāb-hu」が集まり、ムハンマドの息子ディーウダード Dīudād を戴いたが、ムハンマドの兄弟ユースフ Yūsuf はこれに反対して、彼らと対立している [Ṭabarī III : 2022; Murūj 4 : 302]。主人の血統を重視するグラーム集団と傍系の後継者候補との対立という構図は、ムータスィムの血統を重んじたアトラーク部将たちや、ムータディドの血統を重んじたムータディドのグラーム ghilmān al-Mu‘taḍid やバドル Badr ghulām al-Mu‘taḍid などにもみられる典型的なものである [Miskawayh 1 : 40; Ṭabarī III : 2209]。

ムハンマド・ブン・アビー・アッサージには、「200騎を率いる勇敢な男」バールドゥー Bāldū を始めとして、サブク Subk やナズィーフ Nazīf, ワシーフ Waṣīf といったグラームがいたと伝えられ、またアルメニアを任されていたグラームもいたという [‘Arīb : 77, 172; Murūj 4 : 349; Ṭabarī III : 2123; Wuzarā’ : 54]。

このほか、マルダーウィージュ・ブン・ズィヤール Mardāwij b. Ziyār はタバリスターン周辺を支配したズィヤール朝の開祖である。彼は315/927年にジュルジャーン及びタバリスターン両地方を征服したダイラム人アスファール・ブン・スィーラワイフ Asfār b. Sirawayh の部下であったが、これに反逆して王朝の礎を築いた。このとき反逆されたアスファールは「側近 khāṣṣat-hu とグラーム達 ghilmān-hu の人々 qaum を率いて逃亡した」

といい [‘Arib: 154], やはりグラーム集団をもっていたが, マルダーウィージュ自身はトルコ人グラームを登用していたにもかかわらず, 彼らを毛嫌いしていた。彼がトルコ人を嫌ったのは, 過激なペルシア王朝復古主義者であったからだと思われる [Bosworth 1973: 57-58]。これらのトルコ人グラーム al-ghilmān al-atrāk は「あなたに仕えるまでになった qad nazalū ilā khidmat-ka」といわれるところから, マルダーウィージュが積極的に購入したのではなく, 前主人アスファールのグラームが吸収されたものであろう。しかし, ある事件で恨みを買ったマルダーウィージュは逆にトルコ人グラームらに殺害されてしまった [Kāmil 8: 298, 300]。その後, これらのグラーム軍はバグダードへ到来して, 時の大アミールであるバジュカムの軍の中樞を担い, プワイフ朝成立直前のアッバース朝史に大きく関与するのである [柴山 1997]。

#### IV イエと軍事集団

グラームだけでなく自由人の軍人もイエの構成要員としての私的軍事集団化をみせる傾向にあった。

288/901年, カリフのマウラーであるバドルが, 一群の部将を加えられ「軍 al-jund とグラーム達 al-ghilmān からなる大軍」を率いてサッファール朝の残党と戦いに出発した [Ṭabari III: 2209]。バドルはムータディドのグラームのなかでも最も信任が篤く, 前述のようにこの当時「ムータディド軍の主人であり, 彼の事業を任されている」と言われる立場にあった。ムータディドは父ムワッフアクの後を継いでアッバース朝の再建を成し遂げたが, その政権を支えたのは, 宰相ウバイド・アッラー・ブン・スライマーン ‘Ubayd Allāh b. Sulaymān とグラームのバドルである。両者は双壁として官僚と軍を統括していた [Bowen 1928: 44]。

しかし, 彼らによるムータディド体制は, 宰相ウバイド・アッラーとムータディドが相次いで死去することによって揺らぎ始めた。父の後を継いで宰相となったカーシム・ブン・ウバイド・アッラーは, 後継カリフにムータディドの子息 wuld 以外の候補を立てることをバドルに打診した。しかしグラームであるバドルは「恩寵 ni‘mat-i」を理由に, 主人の子息 wuld mawlā-ya 以外のカリフを拒否する [Ṭabari III: 2209]。結局, ムータディドの息子のうちバドルと疎遠であったアリーがムクタフィーとして即位したが, カーシムはバドルへの敵意を募らせ, ムクタフィーを抱き込んでバドルを謀殺するのである。

ムクタフィー即位の時点でファールス地方においてサッファール朝と戦っていたバドルに対して, カーシムとムクタフィーは彼をファールス総督に任じ, バグダードから遠ざけることを試みた。元々中央軍の将軍であるバドルはこれを不服としてバグダードに帰還するべく行軍を開始したが, ムクタフィーらはこの動きを反乱と見なし, 討伐隊を派遣したのである。その後, ムクタフィーらはバドル麾下の部将に帰順を呼びかけてその勢力を削ぎバドル

の邸宅を没収した。これに対してバドルは、自らがバグダードへ帰還することを条件に安全保障を得て自軍の武装を解除したが、カースィムの密命を受けたハージブによって処刑されたのである [Ṭabarī III : 2209–2215]。

このバドル謀殺を巡る一連の動きのなかで興味深いのは、バドルに従う軍団が本来は王朝の軍であるにもかかわらず、バドルの私兵的傾向を強めつつあった事実である。

ムクタフィーがバドル麾下の部将に帰順を呼びかけた際、数多くの部将やグラームがカリフの元に戻ったのは確かである。この動きは二度にわたり、最初に離脱したのは、単に遠征に際して「バドルの指揮下に編入された部将 al-quwwād al-maḍmūmina ilā Badr」である。その代表者はアッバース・ブン・アムル・アルカナウィー al-Qanawī, ハーカーン・アルムフリヒー Khāqān al-Mufliḥī, ムハンマド・ブン・イスハーク・ブン・クンダージュ Kundāj, ハフィーフ・アルアズクータキーニー Khafif al-Adhkūtakīnī らであり、後3者はそれぞれムフリヒーヤ、クンダージーヤ、アズクータキーニーヤといったグラーム軍団の指揮官であったと考えられる [Ṭabarī III : 2210]<sup>15)</sup>。彼らに対するバドルの求心力はさほど強いものではなかったであろう。次に、バドルがフェールス地方からワースィトへ移り、そこでのカリフとの交渉が失敗した際に離脱したのは「彼の部下と大部分のグラームたち aṣḥāb-hu wa akthar ghilmān-hu」であり、明らかにバドルとのつながりの強い軍人たちであった [Ṭabarī III : 2212]。彼らはバドルへの忠誠とカリフへの忠誠の狭間でカリフへの忠誠を選んだのである。

しかし、それでもなおバドルとともにとどまる者があったことに注目しなければならない。彼らは「彼のグラームたちと彼の部下たち ghilmān-hu wa aṣḥāb-hu」と呼ばれ、その実体は「彼の許にとどまった彼のグラームたち ghilmān-hu alladhīna baqawū ma'a-hu」[軍団 al-jund およびクルドやジバールの民 al-akrād wa ahl al-jabal よりなる多数 khalq kathīr] である [Ṭabarī III : 2212–2213]。このうち後者は、ムータディドが即位した当初に実行した騎兵考査において「乙種 al-mutawassīṭ」に認定され、バドルの指揮下に加えられた ḍamma ilā Badr 自由身分の「奉仕軍 'askar al-khidma」である [Wuzarā' : 18–19]<sup>16)</sup>。彼らが最後までカリフよりもバドルへの忠誠を選択したことは非常に意義深い。な

15) 彼らは『宰相史』支出表における選抜兵 al-Mukhtār に相当する [Wuzarā' : 19, 27; Qudāma a : 31–32]。

16) 彼らはジバール地方を支配したアブー・ドゥラーフやアゼルバイジャンを支配したアブー・アッサージがジバールの民 al-jabaliyūn に定めた規定で俸給を与えられ、「ジバールの民 al-jabaliyūn」と総称されていた [Wuzarā' : 19, 27; Qudāma a : 31]。なお [Qudāma a : 31] は al-JLYYN と記載し、同頁註 68 に異同情報として Kitāb al-Burhān には al-ḤLYN と書かれているとする。また Köprülü Libraly 所蔵写本 (MS 1076) のファクシミリ版である [Qudāma b : 14] には、明晰な書体で al-JYLYYN と記されている。これらは [Wuzarā'] の情報と併せて考えれば al-JBLYYN が正しいことは明らかである。



ぜなら、グラームのように明らかにバドルのイエを構成する軍事要員だけでなく、カリフによる指揮権の預託を通じてバドルの指揮下に入った軍までもがバドルの私兵として機能し、事実上「バドルのイエ」の構成要員となっているからである。

このような「バドルのイエ」の在り方は、ムクタフィーによって押収されたバドルの館の様子からも窺うことができる。この手入れの際にニフリール・アルカビール Niḥrīr al-Kabīr, ガリーブ・アルジャバリー Gharīb al-Jabalī, イーサー・アンヌーシャリー 'Īsā al-Nūsharī の娘の子マンスール Manṣūr といったバドルの「グラームと部将たち ghilmān-hu wa quwwād-hu」が捕縛されているのである。彼らが、バドルの館に待機していたことは、彼らが既にカリフの軍から分離してバドルの私兵的な性格を帯びていることを示す。このことはムクタフィーが彼らに対して「おまえたちの誰1人として私が任命したのものではない lastu u'ammir-kum aḥad」<sup>1</sup>と言明していることから明らかであろう [Ṭabarī III: 2210-2211]。実際には彼らを部将 qā'id に任命したのは父ムータディドであろうと思われるが、ムクタフィーは彼らをカリフの軍からはずれたバドルの私兵と見なしたのである。

さらにムクタフィーはワースイトに移ったバドルに対して、イスファハーンであろうが、ライであろうが、ジバルであろうが、どこでも好きな地方へ行き、「それを望む騎兵や歩兵をつれて ma'a man aḥabb min al-furusān wa al-rajjāla」彼らとともにその地方の総督となる wāliyan 'alay-hā<sup>2</sup> ようにと、事実上の割拠を勧める書簡を送っている [Ṭabarī III: 2211]。彼はバドルとその部下の一部を、私的な一体の集団と見なしていたのである。「それを望む」という言葉はムクタフィーが、バドルと一部の軍集団の私的な紐帯形成という事実を認識していたことを明確に示している。

このような事実を象徴的に示すのが、バドルの館に待機していた軍の旗や楯にバドルの名前が記されていたことであり、ムクタフィーは早速これを消すように指示している。彼らは明白に「バドル軍」だったわけである [Ṭabarī III: 2210-2211]。

私邸に軍を待機させていたのはバドルだけではない。311/923-4年に死去したヤーニス・アルムワッファキー Yānis al-Muwaffaqī は、その名からムワッファクのグラームであったことが知られるが、前述のように「彼の邸宅の壁内には選り抜かれた騎兵、グラーム、ハーディムの兵士 1000 khiyar al-fursān wa al-ghilmān wa al-khadam alf maqātil」が常駐していたという。ハージブのナスル・アルクシュエリー Naṣr al-Qushūri は、彼らをと時のカリフ・ムクタディルの麾下におくために息子アブー・アルアッバースを派遣して彼らの説得に当たらせた。アブー・アルアッバースは「私はヤーニスと同じかそれ以上に、あなた達のためになるようにする anā makān Yānis la-kum wa fawqa-hu」<sup>3</sup>と約束したという [ʿArib: 115-116]。ナスルの行動はヤーニスの財産全般をカリフのものとする意味もあったが、同時に、ヤーニスの私兵となった軍事集団を、カリフ軍に再統合する意味もあったといえよう。単にカリフの軍が一時的にヤーニス邸に配置されていただけならば、このような手続きは不必要なはずである。

また、322/934年ムハンマド・ブン・ヤークート Yāqūt が対ズィヤール朝戦への出陣を決定すると、フジャリーヤ軍とサージーヤ軍 al-Sājiya がこれに反発してムハンマド邸に投石を行ったり暴言を吐くなどの騒動を起こした。すると「邸内からムハンマドの部下が迎え撃ち qātalū min dār-hu min aṣḥāb-hu, 彼の部下やグラーム aṣḥāb-hu wa ghilmān-hu が彼らに弓を射かけた」のである [Kāmil 8 : 295]。騒乱を起こしているとはいえカリフの軍であるフジャリーヤ軍やサージーヤ軍に対して、私邸内から出撃して戦う軍集団には、やはり「イエの軍」としての性格がつよくうかがわれる。

「バドル軍」が元来カリフの軍であり、ヤーニス軍がムクタディルの許に再統合されたように、このようなイエの軍事集団の公的性格と私的性格には、微妙な揺らぎが存在する。ムクタディル即位後に専横の振る舞いのあったサウサン・アルハージブ Sawsan はついに捕縛されるに至ったが、その場に居合わせた一部のグラーム min al-ghilmān が彼を護ろうとした。するとムクタディルの勅令が出され「おまえたちは私のグラームであり精鋭である ghilmān-i wa khāṣṣat-i。一方この者は私の奴隷であり所有物である ‘abd-i wa mamlūk-i。わたしにはこの者に問いただすべき話が伝わっている。私はおまえたちが欲する限り、おまえたちに恩顧を与えよう anā la-kum」と伝えられた。これを耳にしたグラームたちは「権力 al-amr はご主人様の許にあります li-mawlā-nā」と応えて従ったのである [Wuzarā’: 156]<sup>17)</sup>。これらのグラームはサウサンへの忠誠とカリフへの忠誠の狭間にゆらいたが、カリフによる恩顧の約束という代償を得てサウサンへの忠誠を放棄したのである。逆に言えば、ムクタディルに対する忠誠は、必ずしも無条件に確定してはいなかったことに注目しなければならない。ヤーニスの際にもみたように、カリフへの忠誠を確定し再統合を遂げるには、カリフによる恩顧の確証が必要だったのである。この点で、ブワイフ朝の忠誠心の在り方を研究したモッタヘデが忠誠心の拠り所として「恩寵 ni‘ma」に注目したのはきわめて適切であったといえよう [Mottahedeh : 1980]。

## おわりに

現在、日本中世史研究においては、従来の武士の在地領主起源論に対して、都市の職能集団起源論が提出され、大きな議論を呼んでいる<sup>18)</sup>。これに対して中東においては、アッバース朝中期をむかえて、初期イスラーム時代以来のアラブ遊牧民の武力性から脱却し、都市の職能集団としてのグラームが軍事力のきわめて重要な部分を担うようになった。グラーム軍団の購入は支配者たちの有力な選択肢となったのである。

17) [‘Arib : 29-30] は、サウサン・アルハージブが捕らえられると、彼のグラームは散り散りになってしまったと伝える。

18) 代表的なものとして [高橋 1999]

本稿においては、軍事集団に限らず、広範なグラームの姿を眺めることによって、イエの家内集団と軍事力の問題を検討してきた。

アッバース朝期の宮廷や有力者たちのイエにおいては、グラーム、ハーディム、ジャーリヤという3つの性の、主として奴隷身分からなる従属的奉仕集団が性別に応じた職能を担当していた。ハーディムという用語は、職能的に共通するところの多いグラームとの対比で、第3の性としての宦官に用いられることが多く、次第にその語法が定着したようである。その一方でアリー・ブン・イーサーをカリフのハーディムと呼ぶような語法も残存した。しかし、ただ単にハーディムと呼ばれる人々は一般的に宦官であったと考えて無理がないであろう<sup>19)</sup>。

このような奉仕集団はイエの危急の際には武器を持ってイエを守るなどの軍事的な働きも行ったが、ムータスィムによるグラーム軍団の登用以降、軍事任務が急速な広がりをもってグラームの職務の重要部分を占めるようになり、軍事専門のグラーム集団も各所に用いられるようになった。これに伴って、グラームと共通する職能を持ったハーディムの職務も軍事的色彩を帯びることが多くなったようである。

このようなグラームの職務の軍事化は、各イエが軍事的な能力を強化し、私的軍事集団を形成するという歴史的な動きに対応したものである。それは、アッバース朝解体期の始まりであり、中央の軍人はもとより、地方の有力者から徴税請負人までが、血縁、地縁、そして財力をもとにして私的な軍事力を形成し、イエの家産管理集団を擬似官僚化して政治的な発言力を強めていった。そしてまた、このイエの軍事化は、グラームやハーディムのような従属者だけでなく、自由身分の軍人の私兵化をも伴った動きでもあった。

カリフに従うべき部将や地方有力者のイエが軍事化し始める状況は、同時に軍人の忠誠心の重層化を招き、自由身分の軍人ばかりか、グラーム軍人にまで忠誠心の揺らぎをもたらした。グラームは基本的には直接の主人に忠誠を誓うものであるが、ときに、カリフはこれらのグラームや私兵の再統合に成功することもあったのである。また、主人を失ったグラームたちが傭兵集団化して複数の主人のあいだを渡り歩くこともあった<sup>20)</sup>。

以上のように、軍事グラーム集団の急速な広がりには、主人に非常に近く、ときには愛と性の対象ですらあったイエのグラームの存在を前提として、イエの軍事化という歴史的な時代潮流を背景に成立したものであるといえよう。

19) カリフ宮廷のみで1万名にも及ぶ宦官が存在したという『宮廷典範』の記述はにわかには受け入れがたいが、宮廷の勢威を示す文脈の中に現れる内容であることを考慮に入れるべきであろう。少なくとも、数が多すぎるから宦官ではない者も含まれているという論法は、性急にすぎる議論であろう。

20) アスファール・ブン・シールワイフからマルダーウィージュ、そして大アミールへと主人を変えていったズィヤール朝のグラームたちなどはその典型であった。

参考文献

- 'Arib: 'Arib b. Sa'd al-Qurṭubī. *Šila Ta'rikh al-Ṭabari*. (ed) M. J. De Goeje. Leiden, 1897.
- Hawqal: Ibn Hawqal, Abū al-Qāsim. *Kitāb Šūrat al-Arḍ*. (ed) M. J. De Goeje. Bibliotheca Geographorum Arabicorum 2. Leiden, (2nd ed) 1968.
- Jawāri: al-Jāhīz, Abū 'Uthmān 'Amr. *Kitāb Mufākharat al-Jawāri wa al-Ghilmān*. In: *Rasā'il al-Jāhīz*. (ed) 'Abd al-Salām Muḥammad Hārūn. 4 vols. in 2. Bayrūt, 1991. 2, 87 – 137.
- Kāmil: Ibn al-'Athir, 'Izz al-Dīn 'Alī. *al-Kāmil fī al-Ta'rikh*. (ed) C. J. Tornenbergh. 13 vols. Leiden, 1851 – 1871.
- Muntaẓam: Ibn al-Jawzī, Abū al-Faraj 'Abd al-Raḥmān. *al-Muntaẓam fī Ta'rikh al-Mulūk wa al-'Umam*. Vol. 5 – 10. Haydarābād, 1357 – 1358 A. H.
- Murūj: al-Mas'ūdī, Abū al-Ḥasan 'Alī. *Murūj al-Dhahab wa Ma'ādīn al-Jawhar*. (ed) Mufid Muḥammad Qamiḥa. 4 vols. Bayrūt, 1986.
- Qābūs: Kaikāūs b. Iskandar. *Qābūs Nāma*. (ed) Gh. h. Yūsufi. Tehran, 1967.
- Qudāma a: Qudāma b. Ja'far, *al-Kharāj wa al-Šinā'a al-Kitāba*, (ed) M. H. al-Zubaydī. Baghdād, 1981.
- Qudāma b: Qudāma b. Ja'far, *al-Kharāj wa al-Šinā'a al-Kitāba*, (ed) F. Sezgin. Frankfurt, 1986.
- Rusūm: Ḥilāl al-Šābi. *Rusūm Dār al-Khilāfa*. (ed) Mikhā' il 'Awwād. Baghdād, 1964.
- Ṭabari: al-Ṭabari, Abū Ja'far. *Ta'rikh al-Rusul wa al-Mulūk*, (ed) M. J. De Goeje. 15 vols. Leiden, (1964 rep ed).
- Wuzarā': Ḥilāl al-Šābi. *al-Wuzarā' aw Tuḥfat al-'Umarā' fī Ta'rikh al-Wuzarā'*. (ed) 'Abd al-Sattār Aḥmad Farrāj. al-Qāhira, 1958.
- Amabe, F. (1995) *The Emergence of the 'Abbāsīd Autocracy: The 'Abbāsīd Army, Khurāsān and Adharbayjān*. Kyoto.
- Ayalon, D. (1979) On the Eunuchs in Islam. *Jerusalem Studies in Arabic and Islam* 1, 67 – 124.
- Ayalon, D. (1985) On the Term Khādīm in the Sence of 'Eunuch' in the Early Muslim Sources. *Arabica* 32, 289 – 308.
- Bosworth, C. E. (1973) The Heritage of Rulership in Early Islamic Iran and the Search for Dynastic Connections with the Past. *Iran* 11, 51 – 62.
- Bowen, H. (1928) *The Life and Times of 'Alī ibn 'Isā: the Good Vizir*. (1975 rep ed). New York.
- Busse, H. (1967) Das Hofbudget des Chalifen al-Mu'taḍid billāh (279/892 – 289/902). *Der Islam* 43, 11 – 36.
- Forand, P. G. (1962) *The Development of Military Slavery under the Abbasid Caliphs of the Ninth Century A. D. (Third Century A. H.): with Special Reference to the Reigns of Mu'taṣim and Mu'taḍid*. Ph. D. Dissertation. Princeton University.
- Forand, P. G. (1971) The Relation of the Slave and the Client to the Master or Patron in

- Medieval Islam. *IJMES* 2.
- Gordon, M. S. (1993) *The Breaking of Thousand Swords: A History of the Turkish Community of Samarra* (218–264 A. H. / 833–877 C. E.). Ph. D. Dissertation. Columbia University.
- Gordon, M. S. (1999) The Turkish Officers of Samarra: Revenue and the Exercise of Authority. *JESHO* 42 (4), 466–493.
- Hoenerbach, W. (1950) Zur Heeresverwaltung der 'Abbāsiden. Studie über Abulfarağ Qudāma: *Dīwān al-ğaiš*. *Der Islam* 29, 257–290.
- 黒柳恒男訳 (1969) カイ・カーウス著 カーブースの書『ペルシア逸話集』平凡社.
- Løkkegaard, F. (1950) *Islamic Taxation in the Classic Period: with Special Reference to Circumstances in Iraq*. Copenhagen.
- 本村凌二 (1999) 『ローマ人の愛と性』講談社現代新書.
- Mez, A. (1922) *Die Renaissance des Islams* (1968 rep ed). Hildesheim.
- Mez, A. (tr. Bukhsh, S. K. & D. S. Margoliouth) (1937) *The Renaissance of Islam*. London.
- 森本公誠 (1975) アッバース朝の国家財政 『初期イスラム時代エジプト税制史の研究』岩波書店, 395–433.
- Mottahedeh, R. P. (1980) *Loyalty and Leadership in an Early Islamic Society*. Princeton.
- Moussa, A. Cheikh. (1982) Ġāhīz et les eunuques ou la confusion du même et de l'autre. *Arabica* 29, 184–214.
- Moussa, A. Cheikh. (1985) De la synonymie dans les sources arabes anciennes le cas de ḥādīm et de ḥaṣīyy. *Arabica* 32, 309–322.
- 佐藤圭四郎 (1959) サーマーン朝の奴僕 *ḡulām* について 『東洋史研究』18 (1), 55–78.
- 佐藤健太郎 (1992) 10世紀後ウマイヤ朝のファター 『イスラム世界』39–40, 73–94.
- 佐藤次高 (1986) 『中世イスラム国家とアラブ社会』山川出版社.
- 柴山滋 (1997) ブワイフ朝以前の大アミールの軍隊構成について 『イスラム世界』49, 19–37
- 嶋田襄平 (1996) 『初期イスラム国家の研究』中央大学出版部.
- 清水和裕 (1990) 9世紀アッバース朝のアトラークと奴隸軍人 『史学雑誌』99 (6), 1–37.
- 清水和裕 (1998) 後期アッバース朝の私領地における国庫の取り分 『東洋史研究』57 (3), 35–66.
- 清水和裕 (1999) マムルークとグラーム 『岩波講座世界歴史 10』岩波書店, 223–245.
- Sourdel, D. (1965) *Ghulām*. *EF* 2, 1079–1081.
- 高橋昌明 (1999) 『武士の成立 武士像の創出』東京大学出版会.
- 氏家幹人 (1995) 『武士道とエロス』講談社現代新書.
- von Kremer, A. F. (1888) Ueber das Einnahmehudget des Abbasiden-Reiches vom Jahre 306 H. (918–919). *Denkschriften der Kaiserlichen Akademie der Wissenschaften, Philosophisch-Historische Klasse* 36, 283–367.
- 柳橋博之 (1998) 『イスラム財産法の成立と変容』創文社.